完全なる勝利と永遠の不幸

ヘタレ＋ドヘタレ＝超ヘタレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
完全なる勝利と永遠の不幸

【Ｎコード】
Ｎ４６２４Ｚ

【作者名】
ヘタレ＋ドヘタレ＝超ヘタレ

【あらすじ】
黒衣の怪物がもたらすのは沈黙。
クリスマスの日に親友を失った男が歩む物語。
彼の勝利は血も流さない、人が死ぬことも無い。
だが、時として残酷な不幸をもたらす。
そんな怪物の物語。

プロローグ（前書き）

プロローグだもんね、語っちゃっていいもんねぇ。
俺のは大体ノリの勢いで書かれる作品が多いからね。
過度な期待はしないでね。

クリスマスは中止。

プロローグ

共に語り合う仲間がいたから笑顔でいられた。
共に笑える友達がいたから生きていく希望があった。
友達が消えた時から彼はおかしくなった。
彼はしゃべること無く、抜け殻となり、すべてに対して無関心となった。
きっと、虚空となった彼の頭の中で思い出が浮かんでいるだろう。
親友との思い出だけを……。

黒衣の怪物が司るのは沈黙。
彼の怒りは敵の血を流さない。
もたらすのは永遠の沈黙。
そんな怪物が愛するのは静寂と傍にいる親友だけ。

1　『沈黙を強いる者』

肌寒くなったせいだろうか。
通っている大学へと歩いていく男がくしゃみをしている姿が目に見えた。
孤独なその姿を見ていた周囲は何も声をかけることなく見ているばかり。
声をかけたところで彼がまともな反応をしてくれるとは思っていなかったからだ。
たった一人だけ違った。
「日影さん！」
温もりのある缶コーヒーを手に真塩が近づいてくる。
自分の名前を呼ばれても日影彰人（ひかげあきと）は何も反応を示さず、呆然と歩いていた。
心ここに在らず……。そんな言葉で例えることができる様子でもある。
「日影さん、寒くなったよ。コーヒーでも飲む？」
「……」
「もう少しで冬だから朝寒いよね。海外研修に向けて新しい服買わないとね」
「……」
笑顔で対応する真塩（ましお）　奈緒美（なおみ）の言葉に彼が答えることは無かった。
一人大学に向けて早足になっていくだけ。
取り残されたと感じた真塩が不意に歩いていた足が止まる。
さびしげな表情で日影の背中を見ては立ち尽くしているだけであった。

日影が向かったのは大学内にある研究所。
その研究所の入り口近くで彼は立ち止まった。

ドアの横には『横峰研究所』と人の苗字がわかるように記されている。
『００１　コードネーム　日影彰人　確認』
扉の上にあるスピーカーからそう聞こえてきた。
アナウンスが終わったと途端に自動ドアが開く。
ドアの向こうへと１歩歩こうとした時、日影の姿が音も無く変わっていった。
元の小柄な青年の姿では無い怪物へと変形する。
見えてきたのは肩から腕にかけて漆黒の甲殻。
その甲殻は体全体まで広がり、強靭さが露にされていた。
首元からは灰色の肌が見え、口から上は異形な仮面が纏われている。
彼が１歩１歩、踏みしめる度に彼を映し出すものがすべて割れていった。
部屋にあった鏡に微かに写した窓ガラス、細かいものではテレビの画面ですら彼の姿を写した途端、一人で割れた。
「今日も不機嫌だなぁ、彰人君」
部屋の椅子に座っていた男　横峰が笑いながらそう言う。
割れた鏡やテレビの破片を素手で掴みながら予め用意されていた袋へと投げ込んでいった。
「また酷い夢をみたかね」
男がいくら聞いても彰人は答えない。
笑うことすらしなかった。
１年前のクリスマスに起きた事件から彼はずっとそのまま。
あの時から心が動いていないことが男にはよくわかった。

　その日はホワイト・クリスマスだった。
家族と過ごす者、恋人と過ごす者等様々ではあるが、その日の彰人は高校の頃からの親友達と過ごすことになっていた
どこか安っぽい食べ放題の店でくだらない話を肴に一晩楽しむ。
そうなるはずだった。

「利久（としひさ）！　正人（まさと）！」
クリスマスの夜、彰人の目の前で行われたのは残酷なリンチだった。
そのリンチで親友二人が死んだ。
一人、彰人は無残な姿だが生き残れた。
腕を折られ、体の半分は炎で焼かれた状態で一般の市民によって見つかった。
誰がやったのか犯人達が見つからず、唯一の目撃者である彰人はショックで記憶も消え、しゃべることも出来なくなった。
唯一の手がかりは彰人の手にあったキーホルダーだけだった。

「終わりだ。お疲れ、彰人君」
検査は無事に終わった。
いつものことでトラブルなど何も無いが、少しでも変化があるかないかと横峰はデータを見比べていた。
彼が毎朝検査を受けるのは勿論、怪物となることが出来るから。
それだけでは無い。
彼に宿った能力を日本という国が研究するため。
その中央に彰人が通っている大学『椿文化大学』があり、高校卒業と同時に彼はそこを通うようになった。
どんな能力なのかはいまだ解明されていない。
発火するわけでも光線を出すわけでも無い。
目に見えない力が彼にはあった。
彰人自身がまだ喋れる頃、なぜその怪物の力を得たのかわからないと本人も語っていた。
生まれついての力だ。
役立てようという考えも無く、力を押さえ込みながら今まで生活してきたという。
特に使い道が無いというのもあった。

大学に招き入れてから2年間。
彼も２０近くになろうとしていた。
だが、能力や外見に変化は無かった。
最初の１年間は話すことも出来るから状態を聞くことが出来た。
クリスマスの悲劇から研究も一時、中断した。
彼の心境を考えてだったが、国からの要請がうるさいために研究は続行することに……。

検査が終わった後、彰人は講義に出ようと廊下を歩いていた。
目的の地についたと途端、聞こえてきたのは怒鳴り声と椅子や机が動いている音。
そんな音を気にすることなく、彼はドアを開いた。
生徒同士が争っていた。
そんな中で彰人が入ったと途端にすべてが静まり変える。
殴り合ってた学生二人が時間が止まったかのように硬直し、周囲にいた生徒達は彰人を見たと途端に後ずさりする。
彼が入ってきただけで講義室の中が急激に変化した。
「おぉ、日影さん、ちーす」
学生らの中からひょっこり顔を出してきたのは朝話しかけてきた奈緒美。
朝と変わらない様子で彰人は無視をして空いている席へと歩いていった。
一瞬にして静まり返った教室内で生徒達も何事も無かったかのように席へと戻っていく。
喧嘩をしていた学生は互いに平謝りで事を静めた。
一瞬で教室を沈黙させた彰人は何もしていないと言う雰囲気を漂わせながらテキストを開いていた。

昼休みの時間、一人寂しく過ごす彼がいた。
誰とも話すことなく、悲しい色をした目が遠くを見る。

彼が今何を考えているのか、どんな時間を過ごしているのか。
周囲に誰もが疑問を抱くがどんなに時間がたっても答えが出ることが無かった。

1　『沈黙を強いる者』（後書き）

書いてて思ったんだ。

ただのぼっちじゃねえか

2　『思い出は自宅に、願いは海の向こうに』

「金溜まったら、海外いきてぇな」
「酒のみてぇなぁ。フランスの酒って美味そうだ」
友人二人が夜な夜なそう呟いていた。
とくにやることが無いと彰人も含んだ3人は理想ばかりを語るようになる。
フランスの旅行も一つの理想。
「行きたいな」
彰人も不意に呟いてしまった。
そして利久がパソコンを立ち上げては早速インターネットを開いた。
旅行サイトを探しては目的のページを探していく
「いい旅行プランがあるで。しかも安い。行こうか、来年の春にでもさ」
「彰人の金が無いだろ。どうするんだよ、彰人」
正人の不安に対して彰人は笑っては「大丈夫」だと言う。
「科学者や国から金せびればいくらでもいけるさ。研究目的って言えばいくらでも援助してくれる」
「罰当たりじゃねえか。まぁ、当然だろうな」
「研究室で馬鹿みたいに怪物、怪物と言われて……彰人は辛くないのか」
ずっと研究の対象として友人の体がいじられていくことが耐えられなかった。
高校の頃からの親友が怪物のように扱われ、世間からも嫌悪され続けてきて、助けられないことが辛かった。
正人も利久も小さくため息をついてしまった。
「今日は俺が飯だったな。任せろよ」
ルームシェアの一人として役割を果たそうと彰人は立ち上がった。
フランス旅行の計画を練ろうとしている利久達のために彼が考えて

いたのは赤ワインを使った肉料理だった。

この日も彼は赤ワインを使った肉料理を作っていた。
無表情、無言で手際よく調理をしていく。
お皿も3人分。
彼が誰のためにつくっているのか。
テーブルに座っている横峰と奈緒美はわかっていた。
目の前に出された香ばしい香りを漂わせている肉料理はきっと、今は亡き友人のために作られているのだと……。
過去に魂を残した彼はこうやって毎日、同じ繰り返しをしていた。

親友の亡き後、住みかとして使っていた家は彰人一人で住むことになった。
遺品はすべて家族の元に戻され、残ったのは彰人一人だけ。
時々、奈緒美と横峰が様子を見にきている。
すでに仕事をしていた二人の苦労話を聞くことが出来なくなり、また二人とゲームをしたり、くだらない話で笑いあうことが出来なくなり、彰人の心を消えかけているのがわかった。
「先生…・・・どうすりゃいいんですか」
「知るか。とりあえず、今度の海外旅行で何か変わるかも。まぁ、楽しみにしとけばいいや」
「……日影さん」
奈緒美が見た先には彰人が赤ワインをボトルで飲んでいる光景があった。
未成年の飲酒ではあるが、彼女は止めることなく見守る。
どんなに酒を飲んでもどんなに体に悪い影響が無い。
彰人の特異な体質を知っていたために止めることはしなかった。

今日、奈緒美と横峰が来たのは二日後に控えた海外研修に向けての準備のため。

彰人の念願であるフランスへの訪問の準備を手伝うために来ている。
声をかければ自分で支度することが出来るが、不安があるために彼の家に訪れていた。
ここを離れて急激に変化が変われば どうなるか。
認知症では無い。言葉をかけて頼めば理解して行動をしてくれる。
今回の大規模な計画『旅行に行く』ということを伝えたらどうなるか。
パニックにならないか不安になってしまった。
奈緒美がそう不安を抱いている中……。
「彰人君、フランス旅行に行こうか」
「ちょ、お～い！」
奈緒美の不安をよそに横峰はためらうことなく彰人に言った。
「親友との夢、叶えたいだろ？いつも国から怪物扱いされてるあんたに俺からのプレゼントだ」
「……」
彰人は目を輝かせている。
いつも死んだ目をしている彼が途端にフランスの話をしたら心を無くす前の目に戻っていた。

今回のフランス旅行は国からの慈悲でも横峰の善意でも無い。
ただの研修旅行のようなものだった。
勿論、学校の行事の一つである。
彰人がフランス旅行の行事を忘れていただけ……。
横峰の分析を聞いて奈緒美もやっと納得した。
「昔のことを思い出してフラッシュバックが起きるかと不安がありました」
「奈緒美ちゃんがそう思うのも無理ない。俺は生物学の研究しかしてないから、正直自身無かったよ」
「でも、よく日影さんを口説けましたね」
「口説くって……他に言い方無いのか。まぁ、そうだな」

彰人が出してくれたコーヒーを一口。
そして、横峰は続けた。
「臭いことを言えば、思い出ばかりに引きこもってるのも心に良く無いと思って……。ただ手を差し伸べただけだよ」
「消臭剤ぶっかるほどの臭さじゃなくて安心しました」
「……そりゃ、良かった」
消臭剤を持ってきた奈緒美を見て、横峰は少し安心した表情を浮かべた。
かっこいいことを言えば、ラベンダーが体にこびりついていたのだろう。
苦笑いで彼はまたコーヒーのカップを口元に持ってくる。
「臭くないのも悪く無い」

フランスのホテルでは近く来訪する日本の学生のために準備が行われていた。
料理から部屋の掃除まで丁寧に行っていく。
外で作業していた作業員がふと、空を見た。
「雪？」
夜空から降りだしたのは白い雪。
天気予報では降り出すと言った話は無かった。
不思議だなと感じた作業員はずっと夜空を仰ぎ見ていた。

2　『思い出は自宅に、願いは海の向こうに』（後書き）

書いてて思った
俺、臭いわ

3　『沈黙の世界』

研修先であるフランスについた。
航空機内で長い時間、過ごしていたためか彰人の表情に疲れが溜まっているようにも見える
「ほらよ」。
横峰が感づいたか彼にこっそり渡したのは栄養ドリンク。
彰人は礼を言うことなく、受け取った。
彼がふたを開けて飲む寸前に一瞬、横峰をチラッと見る様子があった。
「……」
「ん？」
ただ、数秒見ただけ。
見た後は栄養ドリンクを一気飲みした。
「なんて言いたかったんだろうな。こいつ」
「横峰先生、日影さん。行きますよ」
奈緒美が二人の肩を軽く叩き、学生らが集まっている方へと走っていく。
横峰が「行こうか」と声を掛けては彼女の後について行った。
「……」
残された彰人が不意に空を見ては目を見開いた。
少しずつ、少しずつ降り注ぐ粉雪。
不思議そうな表情で曇った空を見上げた。
古い時代の名残が未だ残り、粉雪がその都市を白銀の世界に染め上げていく。
フランスに来てから楽しみが増えてきたと今まで無表情だった彼が静かに微笑んだ。
明るい表情をしたもの、彼の笑みを見る者は誰もいない。
置いてかれまいと彰人が慌てて学生らの元へと走り出した。

フランスに来たのは2学年の生徒全員。学部も大学には二つある。
それぞれが目的の研修施設先へと向かう中、横峰と彰人はその二学部とは別の場所へと移動した。
ホテルの前、外見も立派なその建物へと二人は足を踏み入れる。
その場にふさわしくない外見の二人をホテルの係員や警備員は止めない。
それどころか歓迎した様子で二人を迎え入れた。
「ども～」
横峰が愛想良く笑顔を振りまく。
その後ろに彰人が無表情でついて行った。
その先に何があるのか、何も知らされていない彰人にとって不安しか感じられない。
強張った表情でついていくしか無かった。

たどり着いた先には大きなホール。
その中では威厳のある顔ぶれの要人が椅子に座して待っていた。
フランスの大統領から各国の有名な要人や科学者。
彼らの厳しい視線が彰人へと向けられた。
「お待たせしました。日本語でいいですか？私、慣れないものなんで」
横峰の言葉にフランスの大統領は「構わない」と許した。
外国の人間が日本語しゃべったことで彰人が目を見開いて驚いた。
「彰人君、よろしく頼む。初めての会合で緊張するだろう」
「……」
「どうした？日本語を喋るフランス人が不思議か。君のために練習してきたんだよ」
外国の言語をスラスラと喋る大統領。
彼を不思議そうに見ているばかり。
しばらくして他の人物を見る。

知っている限りどれも有名な人物。
彼らの前で自分が何をするのか。
彰人は不安な表情で警戒をし始める。

この高級ホテルに要人が集まっている。
ホテル内の仲間の報告を聞いた時、ただことじゃないと彼らは静かに動き出した。
聞きなれぬ言語で仲間達が連絡を取り合う。
襲撃のタイミング、武器の調整。
どれも全て完璧だ。
「そろそろ行こうか」
手下達へとそう言葉を掛けた。
「あいつらを捕らえたら身代金いけるだろうよ」
男が弾をこめて、手榴弾を弄びながらホテルへと向かっていく。
入り口に止めた大型トラックから男達が出てくる。
重火器を手にした強靭な肉体を持つ男達が雪の降る日中の街中を走っていく。
市民を無視し、要人達の集まるホテル内へと襲撃。
その勢いを誰も止めることが出来なかった。
ホテルの係員達へと銃弾の嵐を放ち、コンバットナイフの鋭い刃が止めに入った警備員達の首を掻っ切る。
さっきまで優雅な威厳を誇っていたホテルが血塗られていった。
見るに耐えない悲惨な光景。
その光景の中、男達が目的の場所へ向かうため死体を飛び越え、血溜りを音を鳴らし踏んでいく。

「……」
最初に異変に気付いたのは彰人だった。
遠いところから聞こえる銃声。
その銃声がだんだん大きくなる。

「おいおい、敵か」
「門前の馬鹿どもが、役に立たない！」
ホテルを守り、散っていった部下達を非難した要人達。
彼らへと彰人は怒りの表情を向けた。
要人達のために犠牲になった人達を哀れんだ。

ドアが荒々しく開けられた。
同時に入ってきたのは重火器を手にした男達。
今ではテロリストと呼ぶべきだろう男達は銃口を要人達に向けた。
前線で出た男が不審に思ったのは要人とテロリスト達の間にいた一人の男。
怒りに満ちた目を向けてきている一人の男だった。
要人達の集会にふさわしくない小柄な男。
テロリストの前線の一人が面白いと銃口の先を変えた。
「バァイ、グッドボーイ」
引き金を引こうとする。
その瞬間、起きたのは……。
現実だと疑問を抱くほど奇妙な光景だった。

「……なに」
銃弾で風穴を開けてやると笑った前線のテロリストの目に入ったのは奇怪な怪物。
強靭さが露わにされた黒い甲殻と肉体。
仮面をかぶっているが、口元は晒されその口元では唇をかみ締め、血がにじんでいた。
「化け物……」
殺されるかもしれない。
怒っている悟った瞬間、前線で彰人に銃口を向けた男が迷うことなく引き金を引く。
だが、空うちとなった。

「……はぁ？」
「うてねぇ」
銃弾を撃てなくなったことでテロリスト達が動揺する。
恐ろしく異形な怪物の登場と武器の弾詰まりで困惑している中、一人のテロリストが手榴弾のピンを引いた。
いくら怪物相手でも手榴弾の爆発では木っ端微塵になるはずと投げたが。
彰人の足元まで転がり、数秒立っても爆発しなかった。
期待した手榴弾も効果を発揮しなくなった。
「何だよ！これ！」
「ナイフだ。切り刻めばいい」
兵士達を引き連れたリーダー格の男の指示でテロリスト達の持ち武器がコンバットナイフへと変わった。
皆が皆、彰人に向かって襲い掛かってきた。

敵達がナイフを持ち、攻撃を仕掛けてきても彰人は動じない。
動くことも無く、ただ立ち尽くしていた。
彼自身驚いていたというべきだろう。
飛び掛ってきた男は皆、意識を失い床の上へ伏せていった。
ナイフが手から落ち、皆崩れ落ちていく。
最終的には誰一人立ち上がろうとする者がいなかった。
「……」
「お、おいおい……なんだよ、それ」
静まり返ったホールの中、最初に喋りだしたのは横峰。
彼の方へと向いた怪物の状態の彰人。
また彼は驚きの表情を浮かべた。
要人達が椅子から落ちては倒れている。
自分がしたことなのかと、彰人の表情が不安の色に染まっていく。
その目は何があったのか教えてほしいと答えを望んでいるようにも横峰の目には写っていた。

テロリスト達が全員、沈黙した。
そして重火器や爆弾ですら何も音を立てることなく不発に終わった。
襲撃されたホテルが1度騒がしかったのが一瞬で静まり返り、そこに広がったのはただ、静かな世界だった。

3　『沈黙の世界』（後書き）

ここ最近、おもしろいゲームが無い・・・・
ダークソウル買い直そうかな

4　『白金の牙』

要人もテロリストの無事だった。
病院に運ばれた時は意識不明で全身が麻痺していただけで命に別状は無かった。
彰人を咎める者は誰一人いない
そして褒める者も誰一人いなかった。

彰人からしたらどうでもいい出来事だったのか。
帰ってきた途端、学生らの泊まるホテル内のロビーで赤ワインを仰いでいた。
研修を終えた学生達は遠くから彼を見ていては、人数確認、荷物の整理をしている。
もちろん、彼ら学生らの耳にもテロのことは既に入っていた。
それを沈めたのも彰人だと言うことも……。
英雄視するかどうか、また悪魔と見なすかどうか悩んでいる最中だった。
「すげーとか言うレベルじゃないよ！ぱねーす！まじ、ぱねーす！」
一人彰人の周りではしゃいでいるのは奈緒美。
いつものことだと彰人は無視するばかり……。
今夜の彼はいつも以上に酒を仰いでいた。

科学者の目からした驚き以外の何者でも無い。
生まれて初めて彰人の能力を目にしたのだ。
興奮してしまうのも当然だった。
眠っているテロリストから取り出された血液を元に彰人の能力と関わりがあるか無いかを調べていく。
能力から察するに目に見えない気体か何かで沈黙する未知のウイルスを用意したのだろうと予想していた。

「まじかよ……。残っちゃいねぇ」
その仮説はすぐに否定される。
血液には何も残っていなかった。
特殊なウイルスはおろか、人間のＤＮＡ組織まで壊れていない。
そこでまた一つ仮説が立った。
「もしかしたら脳か」
さらに研究にたいする意欲が沸くばかり。
ホテルとは別施設の研究所で機材のコンピューターに目を通し続けた。
細かい反応を見落とすことが無いように……。

　赤ワインのビンを逆さにして振る。
酒瓶の中身が底を尽きたと彰人が珍しく残念そうな表情をした。
好き好んで飲んでいた赤ワインがどこかに無いか。
今の彼はそんな顔をしていた。
「どうぞ」
気前良さそうに酒瓶を差し出したのは一人の学生。
笑顔のまぶしい２枚目の男。
男の金髪が電灯の光で反射しているのが見えた。
「……」
「覚えてるか？俺のこと。去年の夏頃に世話になったな」
「……」
「俺だよ、俺……。稲葉（いなば）　優（まさる）。俺がバイク事故した時、助けてくれたじゃねえか。覚えてねぇか？」
「覚えてないよ。彼は……」
優の肩を叩いては奈緒美が悲しく声掛ける。
「友達を亡くしてからずっとあの状態だし。声掛けて少し反応するだけ。わかる？」
「あ……。そうか。そうだったな」
優はそれ以上何も言わなかった。

ショックをまだ引きずった彼に慰める言葉も無く、無言で酒瓶をテーブルの上に置いた。
「……」
酒瓶をしばらく見つめてから、何を思ったのか彰人が立ち上がった。
酒から視線が変わる。
その先には雪降る景色。
ふと、その景色に向かって彼が歩き出した。

他の学生達も気になっていた。
雪が降るような季節では無いのに真冬のごとく極寒の地に変わったフランスの都市で異常気象。
何か不吉なことが起きているのでは無いだろうかと不安を抱き始める。
彰人もその一人だった。

ドアを開けて真冬の外に出てみれば、雪が降っているはずなのに月が出ていた。
雲ひとつ無い夜空から白い雪が降るという現象は時として人を魅了する芸術にも見えた。
「……」
その芸術へと彰人は睨み付ける。
向かい側のビルの屋上に立っている怪物を見た途端、彼は警戒した。
「どうしたの？」
彼の元に来た奈緒美が不思議そうに聞いた。
睨んでいる先を奈緒美も目で追う。
ビルの上にいた金色のたてがみは目立ち、白銀の翼は月の光を反射している。
「何あれ……」

今ドアから出た男がテロリストを沈黙させた人間だというのが一

目でわかった。
黒い瞳が鋭く睨みつけている。
今にも殺しに来るかもしれないその目は見ているだけで震えてしまうほど。
「……ニヒヒ」
金色のたてがみを揺らして、白銀の翼を羽ばたかせた。
獣が向かうところは決まった。
正義か悪かわからない『沈黙』をもたらす怪物の居場所。
標的を捉えた獣はビルから飛び立った。

危険を察知した彰人が最初に起こした行動は奈緒美を突き飛ばすこと。
もし、そうしなければ奈緒美が真っ二つになるからだった。
獣の爪はホテルのドアを切り裂いた。
標的とされた彰人は強靭な黒い甲殻で身を守った。
手の平を盾に金色の獅子の爪を受け止めた後は、薙ぎ払う。
仮面の下から見える彼の目は警戒から怒りへと変わった。
すぐさま放たれたのは黒い一閃。
彰人が黒い爪で敵を横切りする。
切り刻まれまいと獣はすぐに後ろへ跳び下がった。
「あちゃぁ……」
獣が自分の首をさすった。
手についた金色の液体　自分の血を見ては残念な表情でため息をつく。
「冗談じゃない。少し手加減しなさいよ」
「……」
無言で黒い腕を武器に彰人が怪物へと走り出す。
繰り出される彰人の連撃。
仮面の下から見える漆黒の目は殺意に満ちていた。
「わお、ストォォォォプ！」

黒い爪が顔面を切り刻んでくる寸前に獣が受け止めた。
「ここで私を殺したら、日本とフランスの国際問題になるわよ！」
「……」
獣の一言は彰人の攻撃を止める。
彼自身も自分が何をしようとしているのか気付いたか、おとなしく手を引いた。
しばらくは雪の上で倒れ込んだ獣の姿を見下ろす。
今までの殺意に満ちた目は無くなり、前までのおとなしい目つきに変わっていた。
「……」
「彰人さん！大丈夫っすか？」
戦いが収まったところで奈緒美が駆けつけた。
それと同時に獣が「すんません、ほんますんません」と立っては頭を下げた。
「ちょっと出来心でやっちゃいました。ほんま、申し訳ないです」
獣がしゃべったことで奈緒美が驚き、しばらく沈黙した。
やっと話し出したのは黙ってから5秒後のこと。
「はぁ……」
「ごめん、この姿じゃぁ驚きますね。失敬、失敬。ちょいと待ってね」
そう言うと獣は体を発光させた。
何が起きたのかと、奈緒美も怪物のままの彰人も光を凝視。
しばらくして光から現れたのは、見慣れた人物。
会うのは初めてで会っても、テレビや新聞でもよく見る女性がそこにいた。
長い茶髪は綺麗な艶があり、風で髪が揺れる度に櫛で梳いても引っかからないほど綺麗に見える。
薄い青い瞳は彰人達をしっかりと捉えている。
「フランス首相の娘さん……」
奈緒美の言葉に獣だったフランス人の女性は笑って頷いた。

獣のような姿が容姿端麗な女性の姿に変わったことで彰人は口を開いたまま驚きを隠せずにいた。

「……」

「騒がせて……ごめんちゃい！」、

4　『白金の牙』（後書き）

赤ワインの美味さは異常
やばい、まじうめぇ。

クリスマス、なにをしようか……。
一人……辛い……。

5　『名前の無い怪物達』

彰人のような怪物はこの世界で何人かいる。
何人どころじゃないのかもしれない。
何十人も何百人もいる。
一人で生きている者。
集団で生きる者もいる。
ただ彼らに共通しているのは姿が異形であること。
誰一人怪物となれば回りが逃げるほど醜いものである。
いまだ研究している科学者らの間では名前がつけられていなかった。
名前次第では人権侵害と騒がれるのだ。
人であるかどうかは定かではないが……。

フランスの首相の娘がホテルのロビーに座っている。
その事実は周囲にいる学生を沈黙させた。
「何、黙り込んでいる」
「貴方の日本語の上手さに言葉が出ていないんですよ」
苦笑いで優が言った。
「なんでフランスの人が日本語ペラペラなのか。俺らでさえフランス語や英語なんて満足に……」
「日本語など嗜む程度だ。趣味で勉強してきたからな」
「そりゃ、納得しました。どうぞ」
ホテルのスタッフに淹れさせたコーヒーを首相の娘の前へ差し出した。
彼女が手に取ろうとした時、何か忘れていたのか「そうだ」と学生達の方を見る。
「名前言ってなかったな。アネット・アペール。よろしく」
「よろしくお願いします。優です。それで貴方がさっき襲ったこの二人……」

「奈緒美です。彼は彰人さんです」
替わって名乗ってくれた奈緒美へと彰人は手を上げて礼をした。
話すことが出来なくなった今、彼の言葉を誰かがほとんど代弁しているんだとアネットは把握したか……。
「そこの男が話す時はスマートフォンか何か電子機器で代弁のアプリを使った方が良いみたいだな」
そう笑っては言う。
「なぜ、話さない？自分の口で……」
「……」
アネットの質問に彼は答え無かった。
表情が今より暗くなり、しまいにはため息をつくようになる。
そして奈緒美も優も沈んだ表情を見せた。
その姿からただならぬものがあるとアネットは感じ取った。
「いけないことを聞いたか」

フランス首相の娘がホテルに入っていくのが見えた。
ホテルは日本の学生達が泊まっているはずだ。
黒いロングコートに身を包んだ男が路地裏から様子を伺っていた。
手にある携帯電話の画面には人物画像が出ている。
フランス首相の娘ともう一人少年の顔写真。
今、ホテルの中に入った怪物二人の写真だった。

「友達二人が殺されたのか」
遠くで赤ワインを飲んでいる彰人を他所に奈緒美と優が話をした。
哀れむようなアネットの目はすぐに彰人へと向けられた。
「その力故か？」
「相手側の目的はわかってないです。犯人の顔だってわからないですから」
「今は犯人を捜しているのか」
アネットの問いに奈緒美は首を横に振った。

手がかりはたった一つ、変わったキーホルダーのみ。
そのキーホルダーは彰人の手元にあった。
「彰人さん、それ見せてください」
奈緒美が言うと、彰人は遠くからキーホルダーを投げた。
手に取ったのは奈緒美と彰人の間に入ってきたアネット。
突然、前に出てきた彼女の動きに奈緒美が半ば驚いた。
「……え？」
「ごめんね。驚いた？」
「はぁ……。いや、大丈夫です」
彼女の陽気な謝りを奈緒美は笑っては許す。
彰人とは違う異質な力は奈緒美だけじゃない、他の人間達を驚愕させた。

彰人の存在は他人の脳にある神経を刺激し、彼自身が危険であることを認識させる。
以前に横峰が彼の潜在能力を解明した。
彰人自身が意識しなくても自然とその能力は発生しているために、彼に近づく人物は奈緒美、横峰や他の数人以外皆、好き好んで近づこうとしなかった。
今の奈緒美でも話しかけるのに一ヶ月はかかった。
彼に近づく者としたら長年付き添い、好意を抱いている者。
言うなれば、当時まだ生きていた彰人の親友である利久と正人ぐらいだろう。

人間以上の感覚を持っているアネットも彰人で言う人を遠ざける能力と同じ潜在能力だと奈緒美はすぐにわかった。
「彰人君が持っていたこのキーホルダー。妙なにおいがする」
キーホルダーを見ていたアネット。
誰よりも早く、彼女の言葉に反応したのは彰人だった。
「……」

「何のにおいかな。椿の匂いがする。日本の花だな」
「あ……あ……」
「彰人さん？」
「おい、彰人が……」
何か言葉を発そうとしているのか、しゃべれないのに必死に話しかけようとする彼の行動に奈緒美も優が驚いた表情で見た。
「すげぇ、話そうとしてる」
「彰人君だったかな。悪いが、椿の匂い以外は何もわからない。鋭い五感が役に立って良かった」
「……」
椿の匂い以外の手がかりが掴めなかったことに彰人の表情がまたさっきと同じように沈み込んだ。
アネットからキーホルダーを受け取った彰人がトボトボと背中を向けては去っていった。
「彰人君のあの背中は見てて切なくなるな」
不意にアネットの口から出たのは聞いていて周囲も切なくなるような言葉だった。
「彰人さん」
「……」
奈緒美達が見ている中、彰人はロビーのソファーでまた赤ワインに手を出す。
いくら飲んでも、いくら酔っても（酔うことは無いが）彼の悲しい雰囲気が消えることは無かった。

喜劇とは突然やってくる。
彰人にやられたテロリスト達のような襲撃は稀だがやってくることがある。
今、ガラスを割って吹雪を起こしてきた白い怪物もその類だろう。
突然、ガラスの割れる音で学生皆が入り口の方を見ては怪物の姿を確認した。

「逃げろ！」
すぐに変身したアネットが叫び、生徒達の前に躍り出る。
牙を光らせては、すぐに標的を捕らえた。
「……」
白い二本角の怪物はホテルの中へと侵入してはぎらついた赤い瞳を
アネットに向ける。
怪物自身も標的が決まったのか。
「来いよ。フランス首相の娘さん。かわいがってやるよ」
アネットを相手に日本語で挑発してくる。
日本人だとすぐにわかった。
「まさか……」
「……」
ロビーの中で強い吹雪が舞う。
その中で彰人が立っていた。
襲撃してきた敵を睨みつけたまま、その体勢を崩さない。
「……」
「おいおい、あの表情……絶対、機嫌悪いぞ」
奈緒美の肩をゆすっては他の学生がそう告げた。
「やばい。彼が……」
もし暴走したらどうなるか、想像できなかった。
奈緒美が叫んだ。
「彰人さん！」
名前を呼んだ時にはすでに遅かった。
黒い甲殻とローブの姿に変わった彰人が奈緒美の叫びで止まらない。
黒い爪を露にして一歩一歩、ゆっくりと歩き始めた。
仮面の下から見える黒い目。
写っていたのは彼を苛立たせた白い怪物だった。

5　『名前の無い怪物達』（後書き）

ハッピーメリクルシメェ！コノリアヂュウドモォォォォォ！
もう、幸せになっちまいなよ。
愛してるぜ、みんな。

6　『月夜と涙』

吹雪が高級ホテルのロビーを凍土の世界に変えた。
その中で彼は立っていた。
黒いローブが揺れる。
白い獣と金色の獅子が対立する間に彼は入った。
怒りだけを露にして……。
「来いよ。反政府のテロリストを一瞬で静めた怪物さんよ」
「……」
黒い影が飛び上がった。
宙で攻撃を仕掛けるのかと考えた白い獣が身構えた。
だが……一瞬、黒い影が姿を消す。
静かで早い動きで彰人は白い怪物の目の前に現れた。
「……え？」
宙で舞った黒い影から蹴りが入った。
その一撃で獣の角が２本とも砕け、獣の巨体も１０メートルも吹き飛ばされた。
すぐに起き上がり、再び牙を向けるものの漆黒の甲殻の拳がその牙を砕きに襲い掛かってきた。
牙をへし折ったと同時に白い獣が床の上でもがき苦しんだ。
床の上に溜まる血溜り。
絶対零度の環境下では激痛はするだろう。
それがわかっていたのか、傷跡を彰人が踏みにじった。
「あああ！」
苦痛で獣が叫ぶ。
その叫び声を黙らせんと怒りに任せた彼が出したのは……。
「黒い剣？」
黒い刃は何も映し出さない、彼の暗黒な面を具現化しているようだ。
そして、彼が掴んでいる柄は無数の人間の彫刻がいくつも重なって

いる。
何人いるかは数え切れない。
ただ、苦しんでいるように思えなかった。
奈緒美も優も初めて見る『武器を持った彰人』。
その様は今から死刑を行おうとする者の姿だった。

振り下ろされた時、白い怪物は叫ぶことなく絶命した。
死んだせいか、ホテル内に吹き荒れていた吹雪はすぐに収まる。
騒動が治まったのをわかった教師がロビーの電話を借りて避難した生徒を集める。
ロビーに残された生徒らが怪物の死体を取り囲んでしばらく見ていたが……。
「早く！けが人の治療を！」
「おい、警察呼んでこい！」
しばらくして、学生達の中で冷静でいる者が先導して、けが人の手当てを行う。
中には暖かいものを用意するようにコックの元へ走っていくものもいた。
学生達が騒ぐ中、アネットが変身を解いて、いらだった様子で彰人の下に走った。
「あんた！何で殺した！何で捕まえなかった！」
アネット自身、捕らえて自白させるつもりでいた。
テロリストの一味だということがわかり、捕まえて事件の解決に迎えようとしたもの、彰人がその計画を台無しした。
「余計なところで手を出して！この……」
「黙れ。てめぇの考えなど知ったことか。すぐに消えうせろ！」
乱暴な物言いで彰人がアネットの首根っこを片手で掴んだ。
相手が首相の娘など忘れ、自身の怒りを向ける。
「ぐっ……」
「彰人さん……」

久しぶりに聞いた彰人の声。
彼の声は周囲にいた学生達の動きを止めた。
約1年ぶりに発せられた彰人の声は周囲を驚かせる。
「彰人……」
「何見てる。見世物じゃねぇ！」
名前を呼んだもう一方の片手で突き飛ばした。
荒々しい性格となった彰人の前に優はそれ以上言葉をかけなかった。
「……クソォ！」
苛立ちで汚く言葉を放つ。
その後、アネットを解放し、彰人は外へと走り去って行った。

今まで降っていた雪は止んでいた。
あの白い怪物が吹雪の発生源だったために、死んだ今になって止んだのだろう。
今までホールの中が寒かったためか薄着のまま出ても寒く感じなかった。
公園のベンチの上で彼はうずくまる。
夜になっているため周りには誰もいない。
静まり返っていた。
「わからない。なんで俺は……」

およそ一年ぶりだ。
彼の言葉を放つのにそのぐらい長い年月が掛かっていた。
横峰も奈緒美から話を聞いて、さらに興味が沸きだした。
「おいおい、まじかよ」
「今はどこにいるのか、わからないんです」
「なら、探せばいいだろ。あいつ、スマフォだろ？」
いざというときのためにと……横峰が取り出したのは今流行りのスマートフォン。
新機種の米国唯一大きい会社『オレンジ』が製作した機種『ｇｏｏ

d　pod（グッドフォン）』はおしゃれなデザインと最高機能を兼ね備えたスマートフォンだが、若者向けのそれを横峰が簡単に使いこなしていく。
「世の中が便利になったなぁ。ケータイ電話を追跡できる機能が出来たしよ」
「それは恋人同士のアレ……」
「違う。金かかるんならマジで勘弁だわ。俺のは盗難と紛失防止のためのアプリだ。海外対応だ。ほら、出た」
グッド・フォンの画面に出たのは地図の画像。
画面の中央には赤い矢印が場所を示している。
「ここだ」
「公園か。ちょっと遠いが。私の足なら大丈夫」
フランスに住んでいるアネットにはすぐにわかった。
今のホテルからは少し遠いところ。
アネットが2本足で立つ金色の獅子へと変身する。
獣の如く跳躍でホテルを出る。
雪が降っていない。
翼が広げやすいと満月が浮かぶ夜の中、白銀の翼を広げ羽ばたいた。

今までのことが何も思い出せなかった。
覚えているのは親友二人との記憶と二人が殺されたときのことだけ。
自分が今まで何をしてきたのか。
「なんで、怪物がいるんだ。なんで、殺してしまった」
血まみれになっている自分の手を見て思い出そうとする。
「俺は何を……」
「どもぉ、お兄さん」
地響きが鳴った。
悩んでいる彼の目の前で大きな音を立てて降り立ったのは金色の獅子　アネット。
獅子の姿をしたアネットが人間の姿へと戻った。
「……」

「覚えてるか？私のこと」
少女からそう言われてもまったく覚えていなかった。
覚えているのは怒鳴られた時に彼女の首を絞めたことぐらい。
「……お姉さんは俺の知り合いか」
「今日会ったばかりだ。ちょうど2時間前に。一戦交えただろ」
「首を絞めた後のことか」
「いや……。怪物同士の戦いも……」
「何も覚えていない。俺は……」
彰人は何も思い出せないと頭を抱えている。
意外な展開だとアネットが表情を変えた。
「記憶喪失なんて……複雑すぎる」
自分一人じゃ何も出来ないと悟り、慌てふためいたアネットが周囲を見回した。
「俺はどうすればいい。目の前の怪物を殺して俺は何を……」
「とりあえず、お友達のところに戻ろうよ。連れて行くよ」
「……首を絞めた相手にそこまで親切するのか」
……本当はしたくねぇよ。
そう心の中でつぶやきつつもアネットは作り笑顔を向けた。
「いやいや、こっちこそ怒鳴って悪かった。記憶を失っていることも知らないで……」
「……信頼できるね」
沈んでいた彰人が笑った。
今まで暗かった分、いざ笑うと光りのような輝きがあった。
「……常に笑えよ。馬鹿」
「今、なんて？」
「何でも無いです。行きましょうか。背中に乗ってください」
「あ、よろしく」

夜空で白銀の羽が舞い散る。
金色の獅子の背中に乗っている彼は月を見ていた。

フランスに来ているとアネットの説明でわかった時は、いつのまにきていたのかと驚きを隠せなかった。
だが、今は神秘的な光景を前に惹かれるばかり。
綺麗な光景を見つめる彰人が思い出すのは、親友二人との会話だった。
彼ら無しでこの地にいるのはわかっていた。
それがわかった途端、心の中では寂しい気持ちが広がっていく。
夜空を飛ぶ彰人の目にはいつのまにか涙が溜まっていた。

6　『月夜と涙』（後書き）

寒い、寒いよ
財布の中が・・・

7　『蘇らない記憶』

「……」
やはり状況が理解出来なかった。
彰人は呆然とホテルのロビーを見ている。
彼がアネットに連れられて来た時はほとんど片付けられていたから、何もすることが無い。
あの白い獣は研究所まで連れて行かれたらしいが、何に使うだろうかわからなかった。
……毛皮を剥ぐのだろうか。
そんなことを考えながらソファーでボーとして時間が過ぎるのを待っていた。
ホテルは今夜だけ今の場所を使うという連絡もあった。
無駄に荷物をまとめるなどせずに済んだと少しだけ安堵する。

アネットから彰人の事情を聞いた。
彼の記憶が消えていること。
親友が死んだ時からの約1年間、そのすべてを綺麗に忘れていたことに奈緒美も横峰も驚愕した。
「そうなんですか」
「彼はフランスに来るまでのことを覚えていない。公園で話していて私の首を掴んだところからしか覚えていない。」
「横峰さん……」
「大いに気にすることじゃないだろう。ただの記憶喪失だってな。問題は……彼の能力だ」
記憶よりも沈黙させる能力と新しく現れた黒い剣。
科学的なもので証明できないほど、彰人の能力の謎が深まっていく。
「なんで黒い剣が出てくる。なんで、敵を沈黙させる。なんでそんな力がいきなり現れたか。研究者としては気になるな」

「横峰教授。私から意見を申してもよろしいでしょうか」
アネットからの申し出に横峰は無言で促した。
「私自身も世間で言う怪物です。まだ生物学上名前すらありませんが、一応怪物で」
「おう」
「私の経験上、怪物特有の能力は感情の変動で強さが変わってくるかと。私の能力は結晶の練成です。使い方によっては盾となり、剣となります。ですが、暴走すると……すみません、町一つ結晶化してしまいます」
顔を赤らめながらそうつぶやくように言うアネット。
冷静に考えると恐ろしいことだった。
「人間にやるとどうなる？」
「……結晶化は解除できます。ですけど、３０分立つと死にます」
「そりゃ……。大事にならず良かった」
「あい。そして、彼の能力は……」
アネットの目はソファーに座っている彰人へ……。
「怒りで発動するものかと思います。沈黙と黒い剣。両方とも本来の彼の能力でしょうね。初めてですよね？発動したのは……」
横峰は頷いた。
その後に彼がかばんから取り出したのは、二つの資料。
アネットの前にそれを広げては、説明する。
「こっちが能力を発動する前の彼の組織だ。簡単に言えば他の人間とはあまり変わらない状態だ」
「この２枚目は……変わりすぎだ」
１枚目のと見比べて異様な状態に変わっている。
生物学の知識は乏しいが、見ていて尋常じゃないことは素人であるアネットにもわかった。
「見てのとおり、人間に本来ある細胞だけじゃなく、他の未知なる組織細胞が出来てきたんだ。その細胞組織に何かがあると睨んでいるが……彰人君ど同種族の貴方のご意見は……」

「ごめんなさい。わかりません」
「だろうな」
答えが来なかったものの、満足な表情で横峰は資料を片付ける。
フランスに来てからは驚きの連続だ。
新たな発見があり、楽しいことばかりだったことに満足な笑みを浮かべた。

「彰人」
「優君だったか」
彰人が目を見開き、懐かしそうにその顔を見ていた。
「……覚えてるか、俺のこと？」
「妹さんは元気か？」
やはり、覚えていた。

大学1年の冬。
12月に入った時だった。
自転車で横断歩道を通ろうとする優の妹がバイクに轢かれそうになった。
一緒にいた優は不意に妹の名を叫ぶが、間に合わないのが目に見えていた。
絶望的な状況の中、彰人が現れた。
近くで一人、クレープを食べ歩いていた彼がとっさに変身をしてバイクの前に立ちはだかり、優の妹は怪我も無く無事だ。
スピード違反をしていたバイクを止めた彰人自身は何も無く、バイクを捨ててはは去っていった。
優の妹曰く、『黒い怪物が助けてくれた』
黒衣と甲殻が印象的で今でも忘れられないと言う。

過去に妹を助けてくれた恩人に優は笑顔で振舞った。
「あの時のことも覚えててくれたか。あの時はありがとう。本当に

感謝している」
「あれからまだ日が浅いと思っていた」「
「妹は元気にしているさ。冬休みの後で礼をしようと思ったのに……」
「そうか……。それよりもすまない、さっきはあんな酷いことを言って……」
さっきの出来事だと優は思い出した。
「気にしていない」とまぶしい笑顔で言う。
彰人はまだ罪悪感に苛まされているのか、俯いていた。
今までのことを覚えていないのと人に対する暴言。
彼はため息をついた。

これからどうするか。
そんな話になっても彰人は気乗りでは無かった。
ホールが綺麗になった途端、休む者はすぐに部屋に戻っていった。
旅行の予定は変わらなかった。
研修も一通り終わり。
後は観光を楽しむだけ。
だが、彰人だけはそういかなかった。
「あいつらの葬式、俺は出ていない……」
そう呟いた彼に奈緒美は掛ける言葉を捜した。
「彰人さん……」
「何も言わないでください。奈緒美さん。もう何も……」
横峰ら教師が話し合っていく中、自棄になっている彰人はそれ以上話さなかった。
悔やみ続けた彼を奈緒美は悲しい目で見る。
いつまでこの状態が続くのか。
出来ることなら彼を救いたかった。

去年のクリスマス前の彼とその後の荒んだ彼に関わる者は奈緒美、

優以外でも拭く数人いる。
大学3年生の先輩。
彼の亡き親友の親族。
そして大学の教授達。
彼のケアのために関わる者は今でも増えつつある。
奈緒美が彼のためになろうとしたのは大学で初めて知り合ったのが彰人。
怪物という第1印象はあったが、いざ話すと悪い人間じゃないことがわかった。
優しく、丁寧で礼儀正しい。
楽しいことも勉強も彼から学ぶことが多くあった。
大学を楽しめたのは彼のおかげ……。
人生に潤いをくれた彼を救いたかった。

二度と戻らない空白の1年間。
彰人はそれを取り戻すのにどうすべきか困惑していた。
友の死を受け入れることが出来ない。
受け入れる前に記憶が真っ白になったことが悔しかった。
「くそぉ……。くそぉ！」
怒りだけが彼を震わせた。
他人に対してでは無い。
自分自身に対する怒りだった。

フランス旅行の数日間。
彰人は一人で動き回っていた。
大学の教授の引率を無視して彼が回ったのは酒屋。
唯一彼の中にある明るい記憶は親友と酒を交わす場面だけ。
その場面を思い出した彼が墓に捧げる酒を買いあさった。
いまだに死を受容することが出来ない。
それでも、死んだ友に合わせる顔が無いのも嫌だった。

「これが飲みたかったんだよな。正人も利久も……」
公園のベンチで彼は泣き、酒瓶を眺めていた。
脳裏によぎる楽しかった記憶は彼の胸を苦しめ続けた。
「ごめん……二人とも……」

フランスの旅行も終わりに近づいた。
空港前に学生達が集まり、この優雅な国から離れることを惜しむ声が聞こえる。
そんな学生らを見送るのはアネット。
「日本でも何か面白いことあったら教えてね。アドレス、送ったから」
「ありがとう、アネットちゃん」
奈緒美とアネットと女の子同士が笑顔で見送る。
彰人のこともあり、怪物との関わりということもあり・・・・・・
何より、趣味が共通したこともあった。
「また、お餅について教えてよ！」
「写真、送るね！また日本に来たらお持ちのご馳走作るから！」
「サンキュー！」
食べ物の趣味が合えば外人だろうが関係無いといわんばかりの雰囲気。
唯一、優がアネットを見ながら疑問を抱いていた。
「……なんで英語でサンキュー言ったんだろうな」
「知ったことか」
彰人に聞いても彼は機嫌悪そうに答えた。
答えを返してくれただけでも充分だと優が笑う。
「彰人……だったな」
「……」
アネットが奈緒美と共に彰人へと近づく。
当の本人は黙ったまま、無視を続けた。
「君の力については横峰さんからは聞いている。記憶も……」

「一国の娘さんが関わることじゃねえ。それよりも……白い怪物のことはわかったのかよ。俺が殺してしまって、何もわからなかったんだろ？」
そう聞いてくる彰人の目は鋭かった。
話を変えたのも自分のことを一切関わらせまいとしている心理があるからとわかる。
「……わからなかった」
「悪かったよ。もしかしたらフランスを狙ってる奴かもしれないのに」
「大丈夫さ。そういう方面でヨーロッパは他の地方よりも進んでいる。安心してよ」
「そうか。……元気でな」
その言葉を最後に彼はそれ以上何もしゃべらなかった。
一人、ゲートへと進んでいき、帰国のための飛行機へと足を進めた。
その背中からはやはり悲しみの雰囲気が消えていない。
空白の１年間に今だに苦しんでいる。
「彰人君」
アネットの後ろで奈緒美も哀れむような目を向ける。
これから彼とどう向き合うか。
手を差し伸べることに躊躇いを感じてしまった。
初めて会った時から性格が１８０度変わっている。
やさしく、いつも笑っていた彼が冷たく、怒りだけを向けてくるようになり、その変わりように心を痛めた。

フランスから離陸したのがわかった。
機体が安定したところでアナウンスが流れる。
そんなアナウンスを彰人は無視するかのように音楽を聞いていた。
日本に戻った後のことを彼は考えながら窓際を見た。
空白の１年間の中で自分は親友を殺した相手を探していたらしい。
その中で掴んだ証拠はキーホルダーとそれから匂った椿の匂い。

それだけでは何もわからなかった。
何もわからない分、イライラも増してくる。
日本に着いたら、復讐をしよう。
親友を殺した連中達を今度はこちらで血祭りにあげてやる。
彼の中でそんな執念が湧き上がった。

7　『蘇らない記憶』（後書き）

２０１１年終わりまであともうちょい。
心の準備は出来たか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4624z/

完全なる勝利と永遠の不幸

2011年12月30日01時50分発行